

# 舌を噛み切った女

またはすて姫

室生犀星

青空文庫



京にのぼる供は二十人くらい、虫の垂衣たれぎぬで蔽おほうた馬上の女のすがたは、遠目にも朝涼あさすの中で清艶せいえんを極めたものであつた。袴野はかまのノ磨まろを真中に十人の荒くれ男が峠路とうげみちにかかる供ぞろいの一行を、しんとして展望していた。離れ山の洞窟のこの荒くれ男から、少し隔はなれた切株の上に腰をおろしたわかい女は、なまなましい脚を組んで、やはり山麓をゆく一行を徐おもむろに見まもつていた。

「野伏のぶせ、そちが先に立て。」

あだ名を野伏のぶせノ勝かつというわかい男は、もう馬を引き出していた。後は総勢であつたが、袴野ノ磨はおれが行かなくともよかろうといった。すると切株の上の女はあたしも行くといい、立ち上つた。

「すてはならぬ。」

何故ならぬと、すて姫は気色けしきばんでみせたが袴野はこれには応こたえない、用意した男たちは密林の中にはいると、一瞬の間に姿を消した。袴野は手ぬがねをして眼を放さないでいる。どうして一緒にやらないのさ、野伏と一緒にだからやきを廻まわしているのねと、すては密林がそよともしない山風やまなぞの中でいった。こんな山で女の声こゑが立つ奇異な生なましい感じ、

袴野はすてには答えずに、彼女にちかづく手を引いて、その肩を推いいた。余り嫉やきすぎ  
るわよ、仕事にも出掛けないであたしに付き切りじゃないの。それも仕様がな、お前は  
一日ずつ女になつて行くばかりで、おれはそのわかさを趁おつかけている、おれの外はみな  
わかい男ばかりだ、殊に野伏はわかい、野伏はお前のそばに寄りたがっているし、お前は  
焚火たきびの座でも野伏の向う座にすわるようにしている。おれはお前の細かい気づかいを見て  
いると一日は永く辛つらい、袴野はすて姫の手を引いて洞窟にはいつて行こうとするが、これ  
には、すて姫は少しもいやがりもしなかつた。こう諾きかなかつたらすて姫のこぼれるわか  
さを、溶きほぐすすべも、なかつたからだ。永い愛撫すきの時が終つた。さすがにすてが洞窟  
の前の明るい広場に立つたときは、その肉体は隙すきだらけで柔らかく、もみほぐされてほた  
ついていた。

「いまの内に水あびを。」

「皆のいる間は水あびもさせないのね。」

「皆はそれを見たがるからだ、おれは皆にそれを見せたくない、……」

「あんなに沢山にいる男の眼からどうからだを匿かくしたらいいのさ、歩けば足が出る。暑ければ胸が出る。」

袴野はそれには答えずに、また、手めがねをして眼を旅人の一行から放さない、不思議なことに向うの山やま峽かきに突然黒い人間らしい者が、殆どそれは胡麻粒ごまつぶくらいの一いっ行ぎょうがうごいて、旅人のあとを追うているらしい、向い山のおなじ山稼やまぎの貝かいノ馬介うますけの追手おつてであった。これは無事に落ち著いても財たからは二つの山割りか、悪くいけば揉もみ合いになるに決つていた。袴野は失敗しまつたと呟つぶやいたが、

「すて、あれを見よ。」

「貝ノ馬介ね。貝はお侍だというじゃないの。」

「もとはみな侍なのだ、貝はお前を狙つている。」

袴野はにわかに関自分の装束をつけはじめ、すてはそれに手伝つた。五十二歳になる袴野は野装束をつけると、眼附めつきも足もとも違つた逞たくましさを現しはじめた。しかしすての氣づかいは本氣で言つた。

「女にさわつたからだで出掛けていいの。」

「うむ、だがお前から貫もらつたものでおれが後うしろ足あしを踏むことは滅多めったにならう。」

眼につかれがあつた。それを蔽うてあふれるものもある、ね、氣を附けて、袴野はその言葉にいつわりなぞ潜ひそむものではないと思つた。山塞やまさいにはもう誰一人としていない、袴

野は皆とは一足先にかえることが出来るし、塞とりでにすて一人を置いて行くことの安堵あんどさは、  
どういふ安堵あんどしたことがらよりも、さばさばしたものだつた。

すては谷間に下りる前に、袴野の下著したぎを取り出したが、ふと、野伏の下著もそれにまぜ  
て抱え、日あたりの谷間の岩のうえに坐り込み、野伏の下著をひろげると、その臭気を齷か  
いでさわりを頬にあてて触さわつてみた、乳房から下腹部にかけて例のじいんとして来た、彼  
女はたぐり寄せて縋すがるようにまた下著を齷かいだ、そして勢好く裸になると谷川の淵に飛び  
こんだ、泳ぎ終ると下著をそれぞれにすぎ、若い木の枝にかけて干したが、暑い日ざし  
は彼女の洗つた髪がかわくよりも早く、かわいていた。それを下げて塞とりでに戻ると、野伏の  
下著は野伏の物の中につき込み、袴野の物は袴野のしきりのある塞とりでの奥にしまい込んだ。

すてが再び塞とりでの前に立つて、例の手を拱こまぬいて見やつた時に、廻はるかな山平に袴野ノ磨と貝  
ノ馬介とが、みやこの先刻の女を間に置いて、なにか問答の渡り合いでもしているふうで  
あつた。みやこの女はまだ市女笠いちめがさを被かぶり壺装束つぼしようぞくのままだつたが、突然、貝ノ馬介が  
そばに寄るとその羅うすものを、さすがに手荒いふうではなく物穩ひきはかに引剥ひきはいだ。日の中にさらさ  
れた何処どこかの姫の顔は、見たことのない白いものだつた。すての顔はのぼせ唇はふるえた。  
袴野と貝とが女の奪といあいでもめているのだ。すては塞とりでにいま一頭の馬の用意のあること

を知ると、密林の間道をひたすらに馳はしった。

すての馬上の姿を見ると、貝ノ馬介の小方こかた十人に、袴野の小方十人は機先を制せられて、勢好く著ついたすてを見上げた。すてはまず袴野の顔に激昂のあとのないのを見取り、ついで貝ノ馬介が手綱を取っている手の平の汗までわかるような焦あせりを、眉の間に見附けた。みやこの女はすてが現れたので、さらに二重の驚きをかくしきれないふうだった。すては袴野にいった。

「何故なぜ引き上げにならないの。」

「少しこみ入った話になったのだ、お前はあれに控えておれ。」

「いいえ、この方かたの奪いあいの談合をしているのではないか、貝様、そのようでございましょう。」

「この女の代りに財たからは皆袴野ノ磨に進ぜよう、と、そうおれが計っているところだ、だが、袴野は財は山割りにして女はみやこに還かえした方がよいというのだ。」

袴野はいった。

「この女をわれ一人で都に還すには、おぬしに疑義があろう、おぬしと二人で都はずれまで諸もろとも共に送つて行つたなら、納得が行こうというもの。」

「そこで途中の藪やぶでその腕うでつ節ぶしで貝が殺やられるのか、そうは子供をあやすようにはまいらぬ。」

「貝、おれがそのような嘘吐うそつきに見えるか。」

「殺アヤめ仕事はその場のものだ、そうはさせぬと言つても、そうせねばならない時は殺ヤるし殺ヤられる。」

「ではこの場はどうする。」

「おれに任せろ、なあ、袴野、すて姫に指一本障さわらぬ今までのおれにあやかってくれ。」

「すてにはおれがいる、何を慌ねほけたことを言うのだ、女はおれが都かえに還かえす。」

「そして女が訴えて出たら？」

「都はずれまで送つたものを無下にするようなお人ではなからう、姫ご、わきまえてもらえるか。」

「決してそのようなことは致しませぬ。」

その優しい箏ことのような声だけでも皆の頭は緊しまつた。その時、すてがいった。

「ではあたしが都はずれまでこの方を送りとどけたら、苦情は両方になからう、貝どの、それで財たからは山割りにし今日のところ引きわかれにして下さらぬか。」



貝ノ馬介は少時して意外にも素直に、肯うなずいて見せた。袴野は貝がにべもなく引下がったのがすて姫が口をきいたからであり、そのために袴野はいやな顔をしてみせたが、この場合こうさばくより外に仕様もなかった。貝の物たずねたげなすてに色気のある容ようす子にも、袴野は何時いつかはこの男を殺らねばならないことに、迫られている気がした。すては、貝に、よく聞き分けてもらえて嬉うれしいといい、貝は、すてどのの口利きでは貝も聞きとどけねばなるまいといった。

「ではお姫様、都はずれまでお送りいたします。」

瞼まぶたの切れの上品な彼女は、もう、落ちつきを取戻してお計はからい何ともおん礼の申しようもございませぬといった。織せんしゆ手のかがやきは貝ノ馬介のむねに、まだ名ごりを眼の内にとどめた。この女を還した後の何年かは、女というものをこの山中で知ることの出来ない残念さがあつた。しかしそれを押し切つて女をものにすれば、仲間が割れるばかりか袴野が刃がしらを向けて来るだろう。女一人を手に入れることは山塞さんさいもの者にとって、全部の仲間を敵にまわすことにもなる、禁じられた女の肉体は命とすれすれの線に引つかかっている。突然、袴野の小方こかたの野伏が、立ち上つていった。

「すて様一人では途中が思いやられる。都の姫さまそのままでは土民の戯れが気がかり

だ。」

わしを供に遣つてくれと袴野に乞うた。

袴野は言下にかぶりを振った。こういう機会をうまく、袴野にもすらすらと諾かそうとする虫のよい肚が見えた。

「すて一人でも沢山だ、だが、小方二人あてを両方から従けさそう、しかし野伏はならぬ。」

野伏は苦り切つて引き退がり、すては表には眉も眼もうごかさなかつた。袴野がこれを許すはずはない、でも、万一にも袴野が聞いてくれたらと、それを思い遣るとすては大腿が躍る弾みを感じた。結局、両方から小方二人ずつが従いて、都の女をすてが送ることになり、野伏ノ勝は居残ることになった。

日はまだ高く、二人は馬上で暑さを避けることが出来た。女と名づく者ともう何年も話したことのないすては、都の女の壺装束の綾と、うすものに心が惹かれた。そしてすては、都ではいま装束の流行はどうなっているか、高貴な女はみなやはり輿に乗っているか、道化のしばいがあるか、男はみな太刀をはき、かんむりをかぶっているかなどと訊ねた。そして彼女は十三の時から都の町を歩いたことがない、衣装は悉く人から取り上げたものば

かりで、あるいは短くあるいは長いと笑いながらいった。姫は馬の上で、羅うすもののかぶり物、錦にしきの帯をといてすてに与えていった。

「わらわは四しじょういん条院の藤原良通ふじわらのよしみちの娘、時が経つた後でもお訪ねあれ、必ずおかくまいいたしまする、名は良通の姫とだけ、……」

「いえ、あなた様をたずね身の振り方をつけるようなことなどは、先ず、ごさいますまい、山稼やまぢぎ者は、ことに女の身は明日は誰の者になるかも分らぬ。」

「あなたはその老人の添い方でいらつしやいますか。」

「袴野かまのに十三から育てられ、ただいまは妻になつております。袴野は父、そして夫に代る者です。」

「おん名は、」

「すて、すて姫とみながそう言つております。」

すては自分が都の女と、対等の女らしい言葉をつかい、女らしいよそおいが心にまで入ってくるのが、時間が経つとしだいに判り出して来た。上品なものに崩れかかるようなものが、すてを柔らかく仕立ててくるようであった。都の女はすての顔立にある男らしさを美しいといい、すては女はみなこうあらねばならぬ頸くびのほそれを、都の女にむか対つて褒ほめて

いった。

千畳の藪やぶ前まえで、間もない都がやや夕づいた景色を見て、二人は別れようとして、都の女はすての手をとり、いただくふうにして謝意をのべた。いのちも、からだをも守つてくだすつたあなたは、女であるからそうして下されたのだ、事情あつて都に遁のがれてお見えの折は、きつとわらわを頼つて来てくれと彼女は先刻と同じようにいい、瞼まぶたをしばたいた。不思議な友情をはつきり見てから、すても永い間経験したことのない女の氣持をむさぼるよう、むねにかき推いいた。すては元来た道を、羅うすもで面を蔽おもてうたまま馬をはしらせた。彼女はこの虫の垂たれぎぬ衣うしろが嬉うれしくてならなかつた。

この日袴野と小者らは一時に出払い、山塞には生きものは何も一匹もうろついていなくなつた。すては髪を洗い岩の上でそれを乾かしながら、自分が山稼ぎの中のただ一人の女であることをなんとなく、氣になり出していた。何時いつかの都の女をたすけてから、都の町のようにすが知りたかつたし、夜にまぎれて大路を歩いて見たかつた。この岩上から見える都の煙らしいものは、きょうもあいたいとして愉たのしく揺よう曳えいしていた。彼女は野伏ノ勝を思つた。だがどのようにしても袴野の眼を掠かすめることは出来ない、岩のすきま林の中くさむ

らの間にも、袴野の眼がきらつくと思えば、そこにならずその眼附めつきが見えていた。袴野に拾われなかつたらすては、どうなっている女だか判らない、すての一心もここにある、仕えることの止むをえない、また心からのものも交つていたのだ。彼女はその時、自分の名前が非常に注意深い低さで呼ばれていることを、殆ど半信半疑で耳にいれた。この間際に、すては貝ノ馬介の 巖がんじょう 丈じょうなすがたを山塞の入口に見出した。それは勿論、袴野の他出を知つての事ながら、敵塞に踏みこむということはよほどの決意のもとで、そうなされたことを予感しなければならぬのだ。

「すてどの、馬介が、来ました。」

と、咄嗟とつさでは貝ノ馬介は子供のような不用意な声でいった。

「何の用かや。」

「そなたを推いきに参まつた。」

「たわけたことを言いわしやるな。」

「ここまで来るからには、そなたにも決心のほどを知るがよい。眼をつぶって男というものの賭けたいのちを頼む、それは無下に棄てさせないでな。」

「なりません。」

「そのように言わずに頼む、十年の間耐えていた。」

「……………」

「ただのいちどでよい、いちどで。」

「なりません。」

「手について頼む。」

「どのように言わしてもいやじゃ。」

「何としても反か<sup>そむ</sup>しやるか。」

「頼む、去<sup>い</sup>んでくれ。」

「去なぬ。」

「去ないでどうする。」

「そなたに思いを遂げるのだ。」

「あたしでも女ぞ、たやすくは、させない。」

すては、痒<sup>かゆ</sup>い髪を搔いて見せた。その二の腕は噛みつきたいほど、ふくれて白<sup>しろ</sup>がこぼれた。すての顔色は驚きも怖<sup>おそ</sup>れもみせず、貝ノ馬介が見つめるままの生ぐさい、色気のあるものであった。馬介はずつと近づくといきなりすての手を取り、そばに引き寄せた。す

てどの、かくごはしているなど、貝はがらにもなく優しく言った。いや、心は決めていない、貝どのがどんなふうに出て来るかを見極めているのだといった。貝は、すての裳もに手をかけそれをかかげようとしたが、すては一気に鋭く払い退のけた。ふたたび貝がそれを繰り返した時に、すては貝の手の甲をはたいた。貝はおとなしく手を引きこめると、こんどは肩を推いだこうとし、それも、すてによつてはずみが食わせられた。すてどの、おれに狼の名を著きせぬよう承知してくれと、貝は拝むような眼附でそう言ったが、すては、ではあなたにも恥を搔かさないで推いだただけで帰つてくれ、貝どのの命にかかわることだからといった。

「何としても諾ききいれてもらえぬか。」

「もう袴野の帰る時刻じゃ。」

すては肩からながれる長いからだで、すらりと立ち上った。

貝ノ馬介はもうどうにも自制の利かない、先々の考えを打うち棄ちる時にかかつていた。彼はすての肩を上から圧して、坐れといった。すては素直にべたんと坐った。くずれる肉體はさすがに坐ったままであった。すては貝からのがれる事はおろか、貝のままになるより外はなかつた。逃げてでも逃げ切れぬし、挑いじんでも抗あらがぎがきれるものではない、ただひとつ

の事はうまくだまして貝をそのまま帰すことだけが、一さいが無事にすむことになるのだ。しかしすては身をまかせることがいやであった。ふしぎに考えたこともないほど他の男に身をまかせることが、いやでいやで仕様がなかった。知らんふりをしていればいいじゃないかと、たかを括くくつてみるが、やはりいやなことはいやであった。袴野は勿論野伏にも合す顔がない、なんだか合す顔がないということが、合されない顔になると考えこむと、凜りん乎として来た。しかし貝は両肩を羽搔はがいぜ責めにして、かかった。

「すてどの、眼をつぶつて許してくれ。」

「なりません。」

貝ノ馬介は完全に、すてのすがたを自分の大だいひょう兵な装束のなかに、悠然としまい込み、すては気味の悪いほどしずまり返った。貝はもう言葉というものを発しなかった。物恐ろしい無言の人間が二人そこに置かれたきりだ。かたまりは何処どこまでも声のない間に、時間を揉もみ潰つぶしていつとかれなかつた。貝どの、よしなされと低い声がそういった。何度もそれが言い続けられた挙句あげくに、こんどは叫びになってすての喉から、手むかう声がほとばしった。貝は依然無言だった。その時、すての顔色が突然紫色に変わり次にその唇を二つに割られたときに、貝はそこに永いくちづけをしたが、すてはその間際に殆ど無意識になに



かを唾えこんだ。このはずみに貝は突然、うああ、……という体軀からだの全部からしぼり出された声音を、続け様に草の間にうつ伏せになつて発した。その時、非常に素早い滑なめらかさですては起ち上つて口元に手を遣り、手にべたつく一杯の血を草の間にべつとりと吐きつけた、そしてなおぬたつく口元に手をやって、いそいで谷間に下りると、続け様に水をふくんで、かあつと口を灑すいだ。すての顔色に斑点のようなあお白さが、最初はぼつぼつに現れはしたものの、次第にその斑点はそれぞれに溶け合つて全面を蔽い、彼女はお臀しりのよくな蒼白い顔の女になつた、それは美しいというよりも、皮膚の静まり切つたふくらがり、自分のしたことを些ちつとも悔いていない平坦さを見せ、その顔はかがやいているふうに見られた。

彼女が谷間から上つた時には、貝は、のた打つたあげく、多量の出血でもはやあえなくなつていた。すてはそれを少しばらく時立つて見てから、ボロきれで顔を蔽い、木の葉をからだに被せ、そして両手はしぜんに合あ掌しょうされた。自分のしたことが判りはじめ、それより外に身を避けることの出来ない場面を、すては再度眼にえがいた。そして彼女はその芝の上に坐りこんだまま、芝をむしり取つて汗をふいた。汗はいまになつて全身を、濡らして来た。こうならなかつたら、あたしは貝ノ馬介のものになり、袴野ノ磨のものになくな

つたはずなのだ、これより外にあたしのすることがなかった。彼女はまた夥おびただしい汗をふいた。貝ノ馬介の死体がふいにいま動いたような気がし、すてはボロきれを取ってその顔をあらためて見たが、顔は思ったよりも苦痛の色をうかべずに、柔らかであった。すてはその脛まがたを優しく閉じてやってやはり其処そこから動かずに、芝のうえに坐ってまた冷たい汗を拭ふいて、貝ノ馬介の死体を茫然と打眺うちながめていた。

半時ばかり経って袴野の一行が、野狩の財たからを抱えて皆戻って来た。

袴野ノ膺はすての顔色を見ると、彼自身の顔色もたちまち思いがけない驚きに、曇った。「すて、お前の顔色はどうした。」

すては黙って人差ひとさしゆびで、ボロきれをかむった死体をゆっくりと指さして見せた、すては声が出なかつた。

袴野はボロきれを取り除いて、その死体の顔をあらため、殆ど叫きょうかん喚かんに似た奇声があげられた。

「貝ノ馬介じゃないか、あ、舌を、すて、お前のしわざか。」

「ええ。」

「よくもやってくれた。」

「それより外にあたしの逃場にげばがなかったんだもの。」

むしろ冷然と、舌は偶然に噛み切ったのだ、その心算つもりは頭にも抵抗の時にもなかったと、すては、他人事のように言った。

「おれはいま初めてすてを見直した。それほどにこの袴野を思うてくれていたとは、きょうまで気がつかなかった。」

何んの、と、すては自嘲じちようしてにが笑いをして見せた。

「ただこうなつたのも、その場の廻り合めぐ合せき、貝どのには相済まないこと、あなたにはそれがあたしのおそ事せぬようにして見せただけだ、あたしの心算つもりはそんな気勝きしょうげな気持ではない、ただ、いやでいやでじや。」

「からだは？」

「触られただけ。」

「お前はえらい女だ、もとは侍の落し子らしいが。」

「侍が何か。いまは山者のあぶれ女じや。」

袴野はこういうすてが気負つて言っているのだと思つたが、落著おちつきはらつたすてに、こういう無関心な冷たさがあるうとは思えなかつた。袴野すらも手に負えない貝ノ馬介を、

一撃のもとにやった事が袴野の驚異以上のものだ、こういう驚異の元になるものを持つすてに、彼はにわかには警戒さえも感じた。わかい野伏と事をはかっておれにかかって来ることがないとも限らない、きようは今までにない不思議な美しさを、彼はすての全面に感じた。殺意の後に来る色を失っている皮膚の乾燥した、わずかなやつれがやつと際立きわだって見えた。

「すて、おれはお前をきようから大事に仕えるぞ。」

すては返事をせずに、依然、自嘲をつづけた。

「おれは余りに嫉妬深かった、お前の本来の心も知らなかったのだ。」

「それより貝どのを鄭てい重ちゆうに埋めてやりや。」

「うむ。」

「貴人のようにあつかってやってください。」

その時、袴野は偶然に貝の死体を小者こものにはこぼせながら、その後について言った。

「すて、おれも何時かはこんな目に遭うかも知れない、対あいて手は何処どこにでもいる。」

「山者は仕方がないわ、野晒のさらしさ、あたしだってね。」

「お前は女だ、切りぬけて永く生きられる……」

「おなじ事よ、明日のことは誰も判らない。」

山塞は秋を経て冬にはいると、すての顔色は沈みがちに胸は苦しく、殆ど食物に手をつけずに臥している日が多くなつた。袴野ノ磨は草根木皮をあつめてこれを煮てすすめたが、<sup>しるし</sup>験はなかつた。物忌みや憑<sup>ものい</sup>き者のせいかと、袴野は都はずれに出掛け、<sup>おうな</sup>医術の心得のある媼<sup>おうな</sup>をさがして歩いた。すて自身も何かのせいで憑<sup>ものい</sup>き物でもあるような日頃が鬱<sup>うつと</sup>陶<sup>とう</sup>しく、溪流の岩の上に出て、激しい吐瀉<sup>としゃ</sup>嘔吐<sup>おうと</sup>の叫び声をあげた。それは全身に波を打ってくるような苦痛であり、山の尾根までがその咄嗟<sup>とつさ</sup>の吐瀉<sup>としゃ</sup>のあいだ、波を見るそれのように揺れてくるような気がした。

或る日袴野は一人の年古びた媼<sup>おうな</sup>をつれて、すての容態を見せた。すてはこの媼の顔をみると、人間が次第に古びて行つた処<sup>ところ</sup>で厳しい表情になるものだということを知つた。媼はすてを見ると、かんとんに言つた。ああ、そうか、そうあろうより外に何もないと眩<sup>つぶや</sup>いた。そしてすてに耳打ちしていった。

「懐妊じゃ。」

「懐妊とは？」

「腹に人間の子がうごいていることをいうのじゃ。」

すては驚きを現すまいとして、媼に声低く訊いた。

「何時頃かや。」

「夏の月の中ほどに思われます。」

媼は腹をさすって見てから、間違いないと言った。すてははじめて眼に驚愕の情をあらわし、そしてそれを直ちに承認するふうであった。媼は生れる月と日頃とを示して、迎えがあるなら何時でもまいますと行って、下山して行った。すては疑いもなく貝ノ馬介の子どもを孕んでいることを知ったのだ。すては谷川ベリに出て、眼にうるんだ優しい、いのようなないあまいようなものを腹の中に感じた。あの日のああいいう短い瞬間に一人の人間は死に、一人の人間がうまれるべく用意されたことの、解きようなない出来事の謎がこの女を打って来た。袴野は彼女の前に突つ立ったまま怒ってどなった。

「一たい誰の子だ。」

すては答えなかった。袴野はその日からずっと臥ているすてを、ふて寝でもしているように邪魔者扱いにし、きりようが衰えてゆく一人の女を卑しげに見据えていった。もつと隅っこに邪魔にならないよう寝ている、と。

春近くふたたび媼おうなが登山して来た時、袴野は媼を塞とりでの外に連れ出してきびしい質問を続け、媼は懐妊に不思議のないことを告げた、袴野はそれが孕はらんだ月をつぶさに聞き取り、媼にもはや訪れることなきように、叱るように入った。媼はわたしのせいじゃあるまいしと呟つぶやいて去り、すてはそれらの問答の内容は判らなかつたが、袴野の怒った顔附が何のためにに怒っているかを知つたが、やはり冷然として這入はいつて来る袴野を見返つた。袴野はいつた。

「誰の子だか言えたら言つて見よ。」

「貝ノ馬介どのの子供や、間違ひなく。」

「何故あんな奴の子を孕んだのだ。」

「そんなことがあんな時に誰が判るものか、阿呆あほういうな。」

「判らなかつたのか。」

「死ぬ覚悟で来た人だ、何があたしのちからで防げるものか。」

「そのがきは水で冷やして殺すがいい。」

「温めて永い間生かしてやる。塞とりでのぼろ屑くずをみんな持つて来い、温めてふとらせてやる。

「貝ノ馬介が死んで生れて来たのだ。」

袴野は自分の猛るよりも、すての猛りがさかんで手向い出来ない高飛車なものであること、懸命なそのくそ落著おちつきにこの女、人がちがつて来たと思つた。それ以来、彼は塞の中に何時いつも二つの瞳が、昼も夜もぎらぎらして近寄る気にもならなかつたが、ようやく、野伏ノ勝が不淨物の始末をしているのを今は見遁みのがす気になつていた。野伏ノ勝は夜も昼もすてに附添つつてみとりを続けたが、そんな小汚い女は汝にくれてやると、袴野はやけくそになつて吠鳴どなつた。勝はただ黙々として食餌しょくじのこと不淨物のことを、まめやかに立ち働いた。塞の奥のすての二つの瞳は或る日は野獸の凝視にもえているような時と、また、またたきを失つている茫ぼんやりした時と、あるいは野うさぎのように物かげにかくれようとしてゐる時の、そのかがやきを交叉まじしていた。

金山全塞に緑の季節が来て、媼おきなは登山し、野伏ノ勝は白鼠しろねずみのようにはたらいで、ついに、すては一人のでかい赤ん坊を生み放つた。赤ん坊は育ちに育ち、すてのきりようは赤ん坊を生んだ時から、顔にあつたざらざらしたものまで拭き取られて、すべすべした美しい皮をかむつて来た。袴野の驚きはすての変貌にひきよせられ、彼は目をほそめて、すてのそばに寄ろうとしたが、すては叱り飛ばすようにこの老いた野獸を一挙に退けた。そしてその頃には、野伏ノ勝もそばによせつけなかつた。赤ん坊を抱いたすては、もはや、



それだけで色気たつぷりのこぼれる景色のものであった。何やら、えたいの判らない子守のうたが、塞の奥からほそぼそとそとにまで漏れて来て、小者どもも、あ、そうかとちよつと笑い顔になつて通り過ぎた。

袴野はすてから赤ん坊を取り上げるか、殺すかしなければ再びすてが自分の物にならないことを知つた。或る日すてが寝ている間に袴野は赤ん坊を抱き上げようとして、耳聴いすてに発見された。何する、と、すては叫んで赤ん坊を自分のむねに抱き緊めた。

「そいつがいるからお前はおれを嫌うのだ。」

「この子を殺す気か、本当をいえ。」

「おれに任せよ、苦勞のないようにしてやる。」

「袴野どの、あたしは貝の舌を噛み切つたくらいの女だ、この子に指一本でも触つて見よ、あんたのからだぢゆうに、……」すては煤のようにならぬものを眼附に漂わして言い続けた、「……からだはおろか、ノドブエだつてがりがりみんな噛みくだいて遣る、この子にちよつとでも触つたらそれがあんたの最後だと思ふがいい、ほらね、これだつて何の苦もない、……」

突然、すては爐にささつた竹の火箸を手に取ると、唇に啜えこんだと見る間に、あろう

ことかばりばりと上と下の白い前歯で噛み砕いた。歯と唇とから一面に鮮血が噴いてはしつた。袴野は凜乎としてあの日の貝ノ馬介の、どこが何やら見境のない血だらけの顔を眼にうかべた。

「ほらね、唐金だつてね。」

彼女は再び唐金のべ棒を手に取つて見せた瞬間、袴野はいたたまらなくなつて、にわか用向きがあるよう努めて平気を装うて、急ぎ足で塞の前の場に出て行つた。あのまま昂らせて置いたら、歯は一枚もなくなるまで噛み砕くだろう、何という、何という女だ、あの赤ん坊をまもるためには奴は何をするか判らない、袴野は生れてはじめて怖れというもの、間近の、寢床ではだらしないすてから感じた。ばかばかしい事だが袴野は氣やすめに脅かしやがると思つてみたが、ばかばかしい事は決してばかばかしいものの正体ではなかつた。

袴野はすぐ塞の横手で野伏ノ勝に行きあつた。勝、この間から苦勞をかけたな、行くぞ、彼はそういうと藤蔓を鞘のように巻いた山刀を、石の上でしごいて藤蔓を切り放つた。そして白刃を勝の眼の前のべた。お前も何か持てと、袴野は呶鳴つた。勝は平然として言つた。袴野どの、おれを斬ると仲間が割れる、いまは大事な時だぞ、焦るまいと言つた

ぎり、野伏ノ勝は去つた。おれは早まった、眼がくらんでいるのだ、彼は塞にもどると、すての手当をし、口を拭き薬草を塗つていった。謝る、すて、おれが悪かったと彼はいい続けた。

数日後すては衆人の眼の前で、赤ん坊を抱いて、大胆に殆ど冷却しきつた顔附で、山塞を去ろうとしかかった。袴野はいつた。何処どこに行くのだ、彼女は言つた。

「何時いつかの四条院の姫様の所にこの子をお預りしていただくのや、姫とお約束してあるのだ。」

「そしてもう帰らぬか。」

「それは判らぬ、この子をしかと預かつてもらえるかどうかによつてだ、十三から育つたあんたの恩は無下むげにしない。」

野伏ノ勝が絞るような声音こえでいつた。「戻つて来なされい。」

袴野は一生懸命にこれも優しく言つた。「必ず戻れ、都ではお前のような女はおちついでいられぬぞ、これだけは真実だ。」

「戻るか、戻らないか判らない。」

袴野のいいつけで一頭の馬が用意され、すてはそれに跨またがると例の羅うすものの虫の垂衣たれぎぬを抱え

て、それを証拠に四条院の邸やしきと聞いたみやこに、山の塞を去って行った。茫然となすことを知らざる余りに不意な出来事に、袴野はいまさらすてのすべすべしたからだを、殆ど全身にむず痒がゆく感じながら物ほしげに見送った。

# 青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 下」作品社

1982（昭和57）年6月発行

初出：「新潮」

1956（昭和31）年1月号

※表題は底本では、「舌を嚙《か》み切った女」となっています。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2014年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 舌を噛み切った女

## またはすて姫

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 室生犀星

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>